

## 常行大悲

道綽禪師の安樂集を、聖人信卷末に引いていわく

「大悲經にいわく、云何が名けて大悲と為る。若し専ら念仏相續して断えざれば、定んで安樂に生ぜん。若し能く展転して相勧めて念仏を行ぜしむる者は、此等を悉く大悲を行ずる人と名づく。」と。

信卷末には、金剛の真心を獲得する者は、必ず現世に十種の益を獲とて、その中に「九には常行大悲の益」と挙げられた。

歎異抄の四章には「しかれば念仏まをすのみぞ末徹りたる大慈悲にて候ふべきと、云々」と。

### 人格の破算

今頃夕の勤行の時、歎異抄の第四章を頂いています。しみじみと御念仏の身にしておいたことを喜ばせていただくことでもあります。大慈悲という題で『光明』にもずつと連続して書いていますので、特にこの章は関心も深いわけでもあります。仏道である限り、何時もいうように、頭の仏法、親念の遊戯ではならぬのでありますが、特に大慈悲の問題はそうであります。大慈悲は仏道の正困でありまして、大慈悲があれば仏道は成立するし、無ければ仏道は成立たないのであります。そこでこの四章の初めには

「慈悲に聖道浄土のかわりめあり」

と慈悲の相に二様あることを示され、聖道の慈悲を説明して、

「聖道の慈悲というはものを憫み悲み育むなり。」とあります。「あはれみ、かなしみ」が悲であり「はぐくむ」が慈であります。はぐくむという言葉は大言海には「羽含ムノ意力」といって親鳥がひなを羽交を以て被ひ育つ、又羽の下にひなをはさみつゝむ、といつて、万葉集の歌一首

「たび人のやどりせん野に霜ふらば、吾が子はぐくめ、天の鶴群」と出しております。旅する我が子が、野宿したなら、空の鶴たちよ、吾が子をはぐくんでくれという親心の切なさを出したものでありましょうか、二に、はぐくむはッヤシナヒソダツルッ即ち養育することであるとして、万葉集九雑上の歌一首

「あはれまむと思う心はひろけれど、はぐくむ袖の狭くもあるかな」と引いてあります。ものをあはれまんとしても力およばぬことを歎いたものであります。他の運命をはぐくみ育てる能力も、他の苦悩に大悲同感する心も持っていない私であります。

「しかれども思うが如く助け逐ぐることを極めてありがたし」と言い、又、

「今生にいかにかに愛し不便と思うとも存知のごとく助け難ければこの慈悲始終なし」と、聖人は、慈悲の問題についての人格破産の宣言をしていられます。まことに御言を頂いて見ますと、私には、一切衆生に対する「運命の共感」の能力がない。しかも自分に慈悲がないとは思えないで、人に親切がないと見え、誠がないと思う、そうし

て、慈悲のかわりに、貪愛、瞋憎、不平、愚痴で生きているけれども、それであればあるほど忘れられぬのがこの問題であります。

衆生無辺誓願度 四弘誓願の第一句であります。この利他より外に、自利は成就しない。それに私には慈悲がない、これだけで私の存在価値はない、人格などといったところで、道といったところで、いい加減なことであります。生きるに生きられず、死ぬに死なれないのは、まことにこの故であります。如何なる非難にも価します。如何なる罵倒にも答えはない。永劫の火に焼かれても仕方はないのであります。浄玻璃鏡の前に沈黙して頭を下げて、出離之縁有ることなしと知らしていただくことあります。

### 新しい生命道

然るに、新しい道は開かれたのであります。それは浄土の慈悲であります。

「また浄土の慈悲というは念仏していそぎ仏に成りて大慈大悲心をもて思うが如く衆生を利益するをいうべきなり。」

「しかれば念仏まをすのみぞ末徹りたる大慈悲心にて候ふべきと云々」

慈悲に二つの道があるとたて分けられたのは、頭で考えて二つの道を列べられたのではないのであります。身を以て選択された道であり、自己自身というものに対する内観批判を徹底することによりてなされた決断であります。万人を愛すべきことを叫びつつ、遂に自分の妻一人をどうすることも出来なかつたのがトルストイであります。彼の人類愛の気迫は、地球をつゝむかに見えて、妻一人をどうすることも出来ない、それが人間のすがたであります。万世の大善知識である親鸞聖人が、御長男の善鸞を勘当して父子の義を断たなければならぬ。

「是非しらず邪正もわかぬこの身なり、

小慈小悲もなければ、名利に人師をこのむなり」

この沈痛なる機の深信が、信すべき法を選択決定するのであります。しかしかゝる機の深信は、法の深信から生れたものであります。如来の智慧に照されて、現実の自己を受取つたのであります。聖道門とは道の論理であります。「一切衆生を汝の大慈愛を以てつゝめ、一切衆生の中一人でも苦しむ間は、汝は無間地獄の猛火の中に合掌して永劫一貫の菩薩行を行すべきである。」

この慈悲と智慧との一如なる浄玻璃の鏡こそ、汝の針はどの小事の不満心も棒大の怒を持つ、十悪五逆の真相を知らしめて、新しい生命道たる念仏道に転入せしめたのであります。その時、彼の浄玻璃鏡は消えてなくなつたのではなくて、一持して、阿弥陀仏の上に、法蔵菩薩の五劫の願行の上に本願の上に拝むことゝなつたのであります。

### 念仏即大慈悲

永遠の大慈悲は、生死する相対有限なる私から生れるものではなかつたのであります。大慈悲は念仏行者の上に顕現し、菩薩の上に顕現し、諸仏の上に顕現して道を成就しても、大慈悲は則ち仏であります。大慈悲は南無阿弥陀仏であります。衆生の上

にあつても衆生のものではない。「たとひ我、仏と成らんに、十方衆生よ、本願を信じて念仏申せ、一人でも若し助からぬならば正覺は取らない。……たとひこの身を地獄や餓鬼や畜生等の諸の苦惱の中におくとも」

我等は、無有出離之縁の内観の上にこの大悲本願のおんよびかけを受取らしていただくのであります。そして唯念仏させて頂くのである。一切の自力のはからひを捨て、唯念仏するところに、大慈悲は具体化されるのである。念仏しつゝ、大慈悲を行わずのではない。大慈悲を行ずるとは、お念仏申すことでもあります。御念仏申すことが、大慈悲を行ずることでもあります。如来の行を行ずるのであります。

「若し能く展転して相勧めて念仏を行ぜしむる者は、此等を悉く大悲を行ずる人と名づく。」

誠に感銘すべきみ言であります。大慈悲の問題は、真に人生の根本問題であります。どうしても解決しなければならぬ根本の問題である。

私はこの頃、何も出来ない身であることを思うにつけて、煩惱と死より外ない身の上であることを思うにつけて、私の行ずることの出来るたった一つの行、念仏を廻向して下つてあることを身にしみて有難く思うことでもあります。念仏することは大慈悲を行ずるのであると、私どもが力むのではなくて、仏の仰せであります。「信じて称ふる」ことが私の全てであります。「極重悪人 無他方便 唯称弥陀 得生極楽」の源信和尚―親鸞聖人のみ言葉の忘れられぬ此頃であります。聖人を拝むと、念仏と人が全く一つになっていられるようであります。